

特217
96



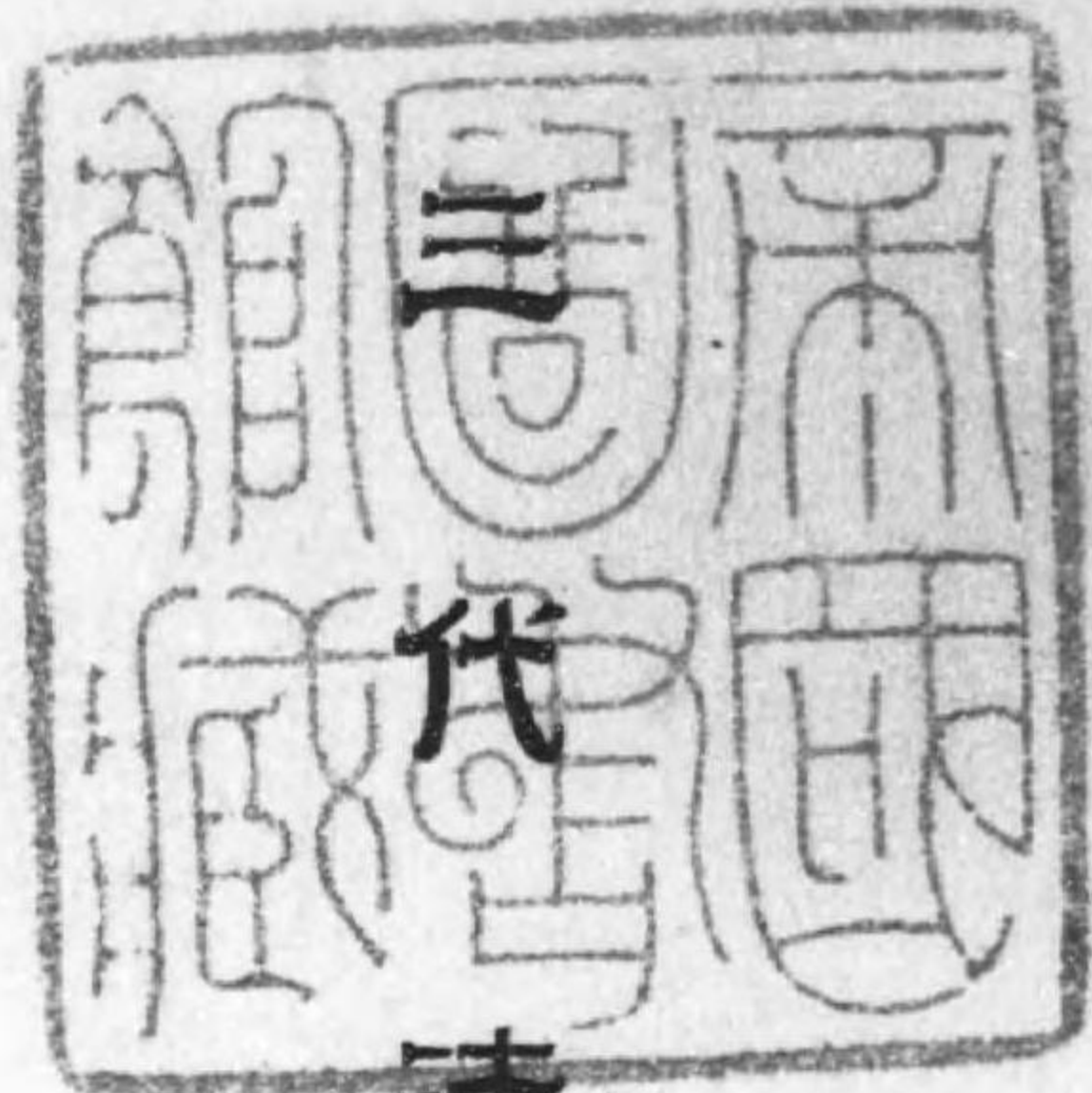
始



特217

96

特217
96



法

語

抄

總本山
知恩
院



は し が き

三代法語とは元祖大師法然上人の吉水法語集、第二代聖光上人の鎮西法語集、第三代記主禪師の鎌倉法語集の三部の總稱である。是等の三部は共に京都二條專念寺の順阿隆圓師が編纂されたもので、隆圓師は文化八年元祖大師の六百回遠忌に際し、祖恩報答の爲に從來の語燈錄等に洩れた大師の御法語十數章を輯めて吉水法語集と題し、有縁の人々に頒たれたが、越えて文政九年正月、二三信徒の懇請に基き、記主禪師御述作の書中より、在家諸氏にも了解し易き文章を抄出し、之を邦文体に改めて鎌倉法語集と名づけ、伊勢松阪清光寺主卓明師等の資助を得て上梓された。次で文政十年十一月、聖光上

人に對し 畏くも大紹正宗國師の諡號御宣下があつたので、其追恩記念に國師の十八卷傳に出でたるもの、及び其他二三を加へて鎮西法語集と名づけ、上梓されたから、茲に三代の法語集が揃ふたわけである。

明年三月當本山に於て第二代聖光上人七百年、第三代記主禪師六百五十年、並に當山第二世勢觀上人七百年の大遠忌法要を勤修するに當り、記念出版の一として今回三代法語集中の意義の難解なもの、又は重複せるもの等數節を省略し、之に附録として享保三年の頃、同じく清光寺の信問師が編輯された筑紫法語集の大部分並に勢觀上人の御述作、選擇要決の一節を添へ、此小冊子としたのである。諸文中稍難解な語句には文後に簡単な註釋を施すこと、

した。

聖教に

壽命甚だ得難く、佛世また値ひ難し。人信慧有ること難し、若し聞かば精進に求めよ。法を聞て能く忘れず、見ては敬ひ得ては大に慶ぶべし。

とあるやうに、今此書を手にせらるゝ善男子善女人各位には、深く佛法値遇の勝縁を悦び、幾たびも味讀して歷代祖師が懇切化導の恩徳を謝し、信行並び進めて往生の大果を得られんことを念願する次第である。

終りに佛專教授石橋、前田兩師に對し、本書校閲の勞を感謝す。

昭和十一年七月

華頂山下にて

編

者

内 容

一 吉水法語抄……………一頁

大原問答 一、己が涯分をはかりて 二、念佛往生は易きか 三、萬行の宗致 四、

末代の根機に準望して 五、勝易の二義 六、廢惡息妄念念佛

安心大要抄に出たる法語 一、念佛に子細なし 二、願力に思ひつく心 三、唯願

力を頼みて

如來御告和歌 熊谷入道へ御返事

淨土無緣悲歎御詞

二 鎮西法語抄……………二七頁

一、御述懐 二、對機說法 三、助け給へ阿彌陀佛 四、自力と他力 五、三心を易く具

するやう 六、往生は三心具足 七、一心と三心 八、念佛申すに四種あり 九、無間修

に長短の二あり 十、誓て中止せず 十一、日所作の念佛 十二、尋常の念佛 十三、往

生せどもやあらん 十四、往生を願はん人は 十五、往生の心ざしましさん人は 十六、

二師の教訓 十七、念佛と六波羅密 十八、みな南無阿彌陀佛 十九、法然上人の遺誓

三 鎌倉法語抄……………五三頁

一、大權の垂迹 二、唯相傳の一筋を信じて 三、三心の義 四、破戒人の往生 五、念

佛にすけをさすまじ 六、先師の定言 七、名號の徳 八、三心を一時に具す 九、三心

具足の自覺 十、聖光上人の念佛 十一、この故實によりて三心を具す 十二、淨土宗の

元意 十三、三心とは 十四、兼信因果 十五、見佛の思ひ 十六、聖光上人と六時勤行

十七、他力の出離 十八、正行と雜行 十九、聲は念をおこす 二十、此度往生遂げずし

て 二十一、前念に命終後念に往生 二十二、仰ひて願文を見れば

附 録

一 筑紫法語抄……………八一頁

- 一、死の一字 二、往生に厭欣心 三、三心の意義 四、助けたまへ 五、解行は眞實に
- 六、一向專修 七、學問よりも念佛 八、曉の寢ざめの床 九、念死念佛 十、死期の近
- づきたる 十一、臨終の用心 十二、祖恩報謝に念佛

二 選擇要決(一節)……………九五頁

已 上

圓光大師御垂誠

吉水法語抄

今より凡そ八百年の昔、久しく泰平の御代を謳歌した京の町も、榮枯盛衰の習ひにもれず、堂上公卿の威勢地に墜ちて、源平こもく、覇權を競ひ、花の都は忽ち修羅の巷と化し去つた、恰も其頃、當本山の開祖圓光大師法然上人は都に程近い比叡の深山で學問修行にいそしんで居られました。

上人は美作の國、三名家の隨一、漆間家の嫡子であつたが、九歳の春、父時國公が不慮の刃にお斃れなされたので父君の遺言に基き佛門にお入りになりました。五歳の春、八重の霞をわけて比叡に登り、日ごと夜ごと、幾千卷の藏經を繕いて、唯一途に佛道成就を急いで居られたが、都に充つる阿鼻の叫びは眞摯な此の學僧を惱まさずにはゐなかつた。そして上人の求めたまふところは自身の解脱といふことよりも、生きながら地獄の苦しみに喘ぐ世の人々を救ふの道であつた。

或時は山を下りて靈場に佛を祈り、或時は奈良の大寺に名僧を訪ふて道を求め、再び山に戻つては經論に眼をさらし、ひたすら一切衆生の得脱を期して精進せらるゝこと二十九年、遂に高倉天皇の承安五年三月、千古の寶庫を開く秘鍵は上人の手に入つた。秘鍵とは、總ての人が南無阿彌陀佛と唱ふれば、必ず阿彌陀ほとけに救はれる他か本願の念佛である。これぞ上人が年來求めたまひし萬民救濟の福音であつた。

上人多年の願望かなひし曉は、最早山に居る用はない。一時も早く此の福音を苦底に呻吟せる民衆に傳へんものと、山を下り東山吉水の里、今の知恩院の土地に小やかな庵を設けて念佛弘通の道場となさいました。

これまでは寺といへば山の奥、道とし云はゞ自力難行、浮世捨てねば佛の道は無

きものこのみ思ひもし、聞かされもしてゐた人々に、その身そのまゝ心に佛助けたまへと思ひ、口に南無阿彌陀佛と唱ふるばかりで、生きてはみ佛に護られ、命終らば極樂淨土に往生し得ると教へられて、長らく生に苦しみ死に悶へた數多の老若男女が、上人の名を慕ふて吉水の庵室へ詰めかけ、他力本願の大悲に頼るのであつた。その中には商人あり農夫あり、武士、道心者、學者、公卿、高僧知識さへもあつた。又畏くも時の御門を初め奉り、法皇上皇の詔を受け、宮中に召されて説法遊ばしたことも再三あつた。

かくて専修念佛の傳道三十八年。遂に建曆二年正月二十五日の正午、元祖法然上人は佛の御名を唱へながら靜に西方淨土へお還りになりました。お齡は八十歳、御遺骨は今も當知恩院の大殿の東、石段上の御本廟にお鎮まりであります。

それより此のかた春風秋雨七百二十餘回、歴代皇室の崇敬厚く、五十年毎に圓光大師、東漸大師等と度々謚號を賜ひ、明治天皇よりも明照大師の勅書をたまはり、上人の盛徳を御嘉賞遊ばされました。

斯やうに當院は日本念佛發祥の根源として、將た淨土一宗八千箇寺の總本山として、五百餘萬の信徒を有し、あの大鐘の響と共に、全國民の心靈に盡させぬ御法を傳へつゝあるのであります。

今此吉水法語集は、數ある上人の御法語中より、今まで餘り廣く世に知られてゐない分を載せたのであります。

吉水法語抄

大原法語

一 己が涯分をはかりて

上人の給はく。予遁世のそのかみより衰老の中頃に至るまで、竊に一代の教文を披きて、つら／＼出離の要義を按ずるに、顯につき密につき、開悟容易からず。事といひ理といひ、修行成就しがたし。一實圓融の窓の中には、多年即是の妙觀に疲れ、三密同體の床の上には、今に現世の證入を失ふ。然る間涯分をはかりて淨土を願ひ、他力をたのみて名號を稱ふ。誠に往生極樂の教行は直至道場の目足なり。有智無智誰の人か歸せざらんや。然るに諸宗

の行人思へらく、口稱の念佛は偏に愚鈍の機に蒙らしめて、眞言止觀の妙行に及ばず。さらに華嚴禪門の宗旨に勝がたし。一文不通の頑魯に於ては、みづから往生の一路を願ふといへども、利智精進の根機に至りては、唯須く現世の證入を期すべしと云云。

- (一) 顯、密 密は密教にて眞言宗、顯は顯教にて眞言宗以外の宗旨をいふ。今は主として天台宗を指す。
- (二) 事、理 事は現象差別の諸法、理は本體平等の眞理。
- (三) 一實圓融の窓云云 天台宗の教理をいふ。(四) 即是の妙觀 右の修行による一心三觀の妙境地。
- (五) 三密同體の義 行者の身、口、意の三業を佛の三業に一致せしむる修行。
- (六) 現世の證入 此の世一生の間に煩惱を斷じて佛の位に進入する。
- (七) 利智精進の根機 智慧優れ、苦修鍊行に堪ゆる人々。

二 念佛往生は易きか

或は惟へらく。念佛往生は易きに似て易からず。如何にとなれば十惡五逆(一)を造ると雖も、深く改悔の心を發して、後に重ねて是れを犯さざるが故に往生を遂ぐるなり。罪業を制止せずんば、たとひ名號を稱ふと雖も往生すべからず。

(一)十惡 殺生、偷盜、邪淫、妄語、兩舌、惡口、綺語、貪慾、瞋恚、愚痴の十罪。

(二)五逆 弑父、弑母、弑阿闍梨、出佛身血、破和合僧の五大罪。

又一念十念の往生は妄念異念を休息して一心不亂に之を行ず。餘念相まじはり、妄念雜起せば行業成ずべからず。故に知りぬ、念佛三昧は若は持戒清

淨道心堅固の人、若は智惠深遠勇猛精進の輩罪障を制伏し。餘念を休息して是を修し是を行ずべしと云云。或は勝の義を許せども易の義を許さず。或は易の義を許せども勝の義を許さず。悲ひかな、かくの如きの輩、わづかに其一を知りて未だ其二を知らず。

三 萬行の宗致

伏して惟みれば眞宗(一)の法門は稍古今に異なり、文の主旨を知らざる人、宗の元由を辨へざる輩、猥りに弘願他力の淨業を輕しめて、空しく聖道自力の修行に疲る。極樂は是れ泥洹無爲の界、諸佛法王の家なり。たとひ利根なりと雖も、而も往生をねがふべし。况や鈍根をや。たとひ上智なりと雖も、而

も他力をたのむべし。況や下智をや。十方佛土の中には唯往生の法のみありて二もなく三もなし。佛の隨縁の説を除く。こひねがはくは異學異見の輩、別解別行の人、まさに邪雜の執をあらためて專修の門に入るべし。弘願の一稱は万行の宗致なり。誰か是を行ぜざらん。果號の三字は衆徳の根源なり。敢て是を嘲ること勿れ。人をして欣慕せしむるの教門は、しばらく淺近なるに似たれども、自然悟道の密意は極めてこれ深奥なり。一念に佛意に契はんと欲せば極樂をねがふべし。一世に行業を成ぜんと欲せば彌陀を念ずべし。

- (一)眞宗 淨土宗のこゝ。古くは淨土眞宗ともいへり。
- (二)泥洹無爲の界 泥洹は涅槃にて、寂滅等こ譯し、悟りの境界の意。

- (三)佛の隨縁の説 佛が人々の個性又は環境に應じて、爲されたる特殊な説話。
- (四)異學異見の輩 學問見解を異にする人々。
- (五)別解別行の人 解釋修行等を異にする人々。
- (六)弘願の一稱 阿彌陀佛の本願に誓はせられた稱名念佛。
- (七)果號の三字 佛果を得たまへる名號、即ち阿彌陀の三字をいふ。
- (八)自然悟道 稱名念佛すれば自然に深遠なる悟道に達せられる。

四 末代の根機に準望して

於戲釋尊出世して衆生を濟度し給ふに、化導百億に普く利益三千にあまねし。化緣薪つきて正像はやく過ぐ。我等生を五濁六惡の末法に受け、罪を生十惡の業道に感ず。善根薄少なり、根性遲鈍なり。戒行持ちがたく定惠修

しがたし。みだりに其分を在世の正機によせて、現世の證入を期すべからず。暗に此身を正像の賢聖に同うして、自力の得道を持つべからず。況や在世の頓悟頓入は多くはこれ權化の示現なり。正像の得道得果は恐くは實業の衆生は少からん。末代の根機に準望するにたらず、當今の凡愚に比較するに及ばざるものか。然るに彌陀の名號に於ては極善最上の法なり。造罪の凡夫なりといへども、是を修すれば往生を得る。他力難思の行なり。具縛の底下なりといへども是を信ずれば來迎にあづかる。

(一)正像 釋尊入滅後の五百年間を正法といひ、其後の五百年(又は一千年)を像法といひ、それ以後一萬年間に末法といふ。即ち釋尊入滅以後を正像末の三時に分ち、正法の時代には修行證悟して教法、修行、證悟の三者を具備するも、像法時に入りては修行の二に止まりて證悟を缺き、末法時

には唯教門のみ残存すといふ。即ち宗教的に見て漸次時代の退化するをいふ。

- (二)五濁 末法の時代には(一)劫濁(天災地變起り諸事悪くなる)。(二)見濁(人類の智慧邪惡なる)。(三)煩惱濁(貪瞋痴ますます募る)。(四)衆生濁(身體虛弱なる)。(五)命濁(生命短縮す)。以上五種の惡難激増するなり。
- (三)六惡 眼耳鼻舌身意の六根の所作皆惡業を造作す。
- (四)四生 生物の出生に四種の別あり。胎生、卵生、濕生、化生是れなり。
- (五)賢聖 三賢(十住、十行、十回向位の菩薩)三、十聖(十地の菩薩)。
- (六)權化の示現 佛菩薩が衆生濟度の爲に權りに人間界に生れ現はれたまふこと。
- (七)末代の根機 末法時代の人間の宗教的素質。
- (八)具縛の底下 煩惱に束縛せらるゝ最底下劣の機根。

五 勝易の二義

此念佛に勝易の二義あり。勝の義といふは、曰く、至極大乘の意は體の外に名なく、名の外に體なし。萬善の妙體は名號の六字に即し、恒沙の功德は口稱の一行に備ふ。大願業力の構出す所、萬徳を行者に讓與せしめ、他力難思の巧方便、一稱を衆善に超過せしむ。知識廣讚すれば猛火涼風となり、善友をして稱へしむれば金蓮果日のごとし。大利の名號無上功德なり。易の義といふは行住座臥を論ぜず、之を修すれば來迎に預る。時處諸縁を云はず、之を稱ふれば往生を遂ぐ、是則ち身心の濁亂に依らず、唯他力の引攝に依るが故なり。

(一)知識廣讚 觀無量壽經に一生造惡の者も臨終に善知識の勸めにより十念稱名すれば猛火墮獄の苦み

忽ち變じて清涼の風なるを説けるをいふ。

(二)金蓮果日 其時太陽の輝くが如く麗はしき金蓮華の來迎を拜す。

六 廢惡息妄と念佛

凡そ聖道自力は罪惡を制止し、妄念を休息せざれば、其行成就する事なし。生死罪濁の心泥、萬行水精の珠を汚すの義たとへて知りぬべし。是則ち珠の力用弱きが故に水澄まず。水澄まざれば光色顯はれざるなり。本願名號の體はしからず、一生造惡の凡夫、相續妄念の衆生、隨犯隨懺を忘れざれば衆罪を消除し、唯願唯行を具すれば淨刹に往生す。是則ち彌陀如來の至極無上の淨摩尼珠は凡夫罪濁の心水に汚されず、珠の他力强きによりて無量生死の泥濁、頓に法性の清水となる。喩へて思ふべきものか。凡そ廢惡修善は佛教の正意

なれども廢れどもくすてられざるをばいかゞせん。息妄修心は行道の大途なれども、息むれどもく息られざるはいかゞせん。唯須らく彌陀の本願を頼むべし。他力の名號を唱ふべし。これ則造罪の上の廢惡の法なり。妄心の中の息妄の法なり。佛法修行の中に是より易きはあるべからざるなり。

安心大要抄に出たる法語

一 念佛に子細なし

上人御法語に云はく。予此頃念佛を行ずる者を見るに、往生を願ふ人は多けれども、正首に本意を遂ぐる者は稀なり。然れば同じく念佛を申せども、子細のあるにやと人ごとに思ひ迷ひて、我身の振舞ひ心の持ち様、いかなる

べきやらんと深く歎くは、誠に往生の志深く生死を恐れたる色なれども、是によりて異學異見の人に誑されて信心の浮かる、事多き也。或は妄念をとめ心を澄まして念佛せよと勸むる人もあり。或は身を清め境界を離れて念佛せよと勸むる人もあり。或は淨土外に無し、心即ち佛なりと觀ぜよと勸むる人もあり。或は淨土も無し地獄も無し。迷も無し悟も無し。厭ふべき所もなし。願ふべき所もなしと教ふる人もあり。是等は皆往生の爲の仇なり。妄念を停め心を澄して念佛せよと勸むるは自力の修行なるが故に、本願他力の道を失ふ咎あり。淨土外になし自身佛なりと勸むるは深理の觀法なるが故に、愚痴の凡夫かなひ難き故に、是また稱名念佛の行者の往生を塞ぐ咎あり。淨土

なし地獄なし、まよひなし悟なしといふは外道の邪見なるが故に、念佛往生の大なる魔縁と思ふべし。又人目ばかりに往生を願ふよしをして、内心に志の薄きを虚假名聞とて往生をとげぬ心也。まことに往生を願ひ念佛を稱ふる事、ひまなきに似たれども往生を得がたき事の當世多きは、上より謂ふ所の悪しざまなる方に趣きたる者どもなり。ゆめ／＼これによりて念佛往生の道を思ひ亂すべからず。

二 願力に思ひつく心

先づ往生する念佛の行者といふは我身を愚痴になしかへして、人の子の親の力より外に憑む所なく、從者の主の恩より外にまつ事なきがごとく、偏に

阿彌陀ほとけの願力を憑み、念佛の功力をのみ信じて、おめ／＼として南無阿彌陀佛／＼と稱へ居たれば、念佛の力にて無始の罪障も消え、念佛の力にて生死の絆も切れ、念佛の力にて諸佛にも護られ奉り、念佛の力にて觀音勢至をも友とし、念佛の力にて淨土にも生ずべしと、深く思ふより外に他事なく、頼みをかけて願力に思ひつく心を往生決定の心とは申なり。聊も我力と思ふ心あるべからず。若たま／＼澄む心のあらん時は、是も本願の力によりて澄むと思ふべし。念佛のまめに稱へられん時も、是も佛の攝取の力なりと思ふべし。我身の懈怠ならん時も、これにつけても本願の力ならでは、いかでかかゝる凡夫、此たび生死を離れるべきと思ひて南無阿彌陀佛／＼と唱ふ

べし。となふれば即ち其罪は滅するなり。是を念々稱名常懺悔といふなり。良きにつけても願力なり、悪しきにつけても願力はなれては叶ひがたしと思へば、自然に念佛はすゝまれて往生の道は近くなるなり。

三 唯願力を頼みて

三心といふは一心なり。一心といふは唯願力を頼みて聊かも疑はざるなり。疑はざる心になりおほせぬる上には、唯稱ふるより外には別の子細なし。子細なき所に子細をつくる時、往生の道には迷ふなり。出離の道々教ふる人は多しといへども、夫に目をかけずして、たゞ本願他力の往生の一道に思ひつきて、念佛する人を決定往生の人とは申なり。此信心たちぬる人は百千人が

中に一人も生れぬは有べからず。唯信じても信じ、頼みても頼むべきは六字の名號ばかりなり。あなかしこく。

如來御告和歌

眞如堂緣起に曰はく。或時眞如堂の如來、法然上人にさづけ給ひける歌

たゝたのめよろつの罪はふかくとも

わか本願のあらんかきりは

此歌を上人蓮生法師かたへ、念佛の名號書て遣はす、此名號の側に片假名にて書かる。よつて熊谷入道方へ、狀の御返事にいはく

はるかの程、わざと人を上せ給候、悦入候。さりながら事あたらしき御尋に候。浄土宗の肝心、此度必ずく往生し候事は、人にはよらず。誰々も唯申せば助るとばかり心得て、世に類なき悪人なりとも、南無阿彌陀佛と稱へれば、一念にても決定往生を遂げ候なり。此外に別に心得候へば往生をしそこなひ候。又その腹のあしき事、京にも御所中にもかくれなく候。是非に御なをし候べく候。腹悪くとも往生は決定遂げ候べく候。源空が一期の程は中を違ひ可申候。念佛がなま中なるとて、縛り叩く事、更に經釋に見えず候。此度目出度なをし候よしにて御音信候へ穴賢。

又勢觀房へ書てさづけ候金色の名號、あまり欲しさに押て取らるよしうけ

給候。是は罪か、くるしからぬかの御尋承り候。たとひ罪にならずとも、他人の物ををさへて取る法や候。其上大なる罪にて候。急ぎ返され候へ。是も腹の悪きから起る事にて候。志は哀れに候程に、名號書て參らせ候。わきの歌は眞如堂の如來より授け給ひ候歌にて候。金色にしたく候へども急ぐ便宜にて候程に、墨のまゝ參らせ候。京と國と程遠く候程に、しるべに判を加へて參らせ候。惡筆にて人の見候處も憚りながら、師弟の契約にて候へば、かつらは形見に候穴賢。

建永二年正月朔日

熊谷入道殿

源空

尚申候。金色の名號は勢觀房舎兄の臨終に、光明感じ候とて猶さら秘藏候。替へに書て授くべきよし申候へども、瑞光が候しほどに元のを請ひてとわび候。ひらに返され候へ。頼み申入候。くれぐれ短氣なる事然るべからず候穴賢く。

淨土無緣悲歎御詞

十六門記

ある時上人悲歎しての給はく。當世諸方の道俗を見聞するに、無道心の者は悉く名利に住して修行する事能はざれば、生死を出るにあらず。道心智者は今度輒く生死を出がたしと思ふて、遠く來縁を期す。是故に順次の得脱甚

だ思ひを絶えたり。信心の手を空しくして法財をとらず。所詮これは是淨土の縁なくして累世難行の機なり。或は淨土の縁あれども未だ良師に遇はざるの人なり。かくの如きの二機は淨土の易行易往なることを知らず。必ず永劫の行に趣く。爰を以て源空が初の師、肥後の阿闍梨皇圓は宏才博覽にして智慧深遠なりしかども、我が機分をはかるに、今度生死を出がたし。蛇身長命の果報をうけて、彌勒の出世に遇ふて得度せんと欲しけり。其願空しからず、大蛇の身を受けて、遠江國笠原莊 櫻池に住み給ふ。智慧あるが故に生死の離れがたき事を知り、道心あるが故に、慈尊に遇はんことを願ふ。然れども未だ淨土の法門を知り給はず。誠に淺猿しき事なり。此條源空が深き歎な

り。爾時そのとき我若われもし此法門この法門を知得しりえたらましかば、信不信しんしんはいざ知らず勸化くわんげし申さ
んものを。哀あはれなる哉かな悲かなしいかな。出離しゅつりの甚ただ難かたき事を深く悲かなしみて、蛇身じやしん
三熱さんねつの苦くを受け給はん。

(以下略之)

吉水法語抄 終

正宗國師垂誠
鎮西法語抄

鎮西國師は筑前の國香月の庄にお生れになり、幼少より天台宗の寺に入つて學問修行なされ、聖光房辨長上人と申上げましたが、三十六歳の時、東山吉水の草庵に、初めて元祖大師法然上人を訪ね、大師の深遠なる御識見に推服して直に門下となり、前後八年に涉つて親しく御指導を受け、淨土の法門を殘らず御相傳なされました。其後郷里九州へお歸りになつて到る處に多數の寺院を建立し、盛んに本願念佛を弘通せられました。又徹選擇集、念佛名義集等數部の御著述をお殘しになつたが、就中、末代念佛授手印は本宗の傳書として最も重要な書物であります。國師は遂に嘉禎四年二月二十九日筑後の善導寺で御入滅遊ばされました。時に御歳七十七、明年は正に七百年忌に相當いたします。文政十年長くも仁孝天皇より優渥なる勅書と共に大紹正宗國師の謚號を賜はりました。

鎮西法語抄

一 御 述 懷

聖光上人しやうくわう大和尚だいくわしやうのたまは、此辨阿三十六と申せし年、五月の頃より法然上人の御房ごぼうに参りて、四十三歳の七月まで、八年相副あいそひ参らせて淨土の法門を教へられたてまつり候ひしに、上人年の寄らせおはしまして、日の暮れざまには常に御覽ごらんずる人をも得見知らせ給はぬ様なりしに、みづから仰せられけるは、我身今は齡闌よはひたけて日來見知りたる人をも忘れたれど、手自許せこもごを忘れぬぞよ、其故は台嶺(一)だいれいに人多けれども年來の間、契ちぎりありし人は實地房(二)じつちぼうの法印なり、彼の法印は叡空上人の菩薩戒の弟子なり。我また叡空上人の弟子なり。此故

にかの法印ほういんとは一室の同朋どうぼうなれば二世の契深ちせきかりし。然るに手自てごは彼の法印ほういんの許もとにて天台てんだいの法門ぼうもんを習はれたり。其契深ちせきかりし法印ほういんの弟子でし、今我いまに従したがひて此浄土じよとの法門ぼうもんを習ひ傳ふと思ふ故に、露塵つゆちりばかりも忘れ申さぬぞよと仰給ひし事、片時かたときも忘るゝ事なく、哀あはれに覺おぼえて涙もとゞめがたし。しか思召おほしめける御志深みしき故にや、菩薩ぼさつ戒かいを授けては(三)三戒さいがい檀だん建立こんりふの次第しだい明かに教へつゝ、その外(四)三論さんろん、華嚴けごん、佛心ぶつしん等の諸家しよけの法門ぼうもん、龍女(五)成佛りやうにょじやうぶつ、天台てんだいの論決ろんけつまでも教へ給ひし事、いつ忘るべしとも覺え侍はべらず。かやうに浄土宗じよとそうの法門ぼうもんのみならぬ餘法よほぼうをも教へ給ひし事にて候ひしかば、其後そのち法然上人ほうねんしやうじんの御行儀おんぎやうぎに露つゆたがひ奉らずして、毎日阿彌陀經あみだぎやう六卷、六時禮讚らいさん、六万遍の念佛おんがた怠たらず勤つとめ候なり。

(一)台嶺 比叡山をいふ。我國天台宗の根本靈峰なるゆへ、斯く略稱せらる。

(二)實地房の法印 諱を證眞といひ、比叡山の學僧にて法華三大部私記三十卷の著述あり。

(三)三戒壇 聖武天皇の御宇に大和東大寺、下野藥師寺、筑前觀音寺の三所に初めて授戒の道場が設けられ、これを三戒壇といふ。

(四)三論、華嚴、佛心 共に宗旨の名にて三論と華嚴とは南都六宗の内。佛心は禪宗の事なり。

(五)龍女成佛 法華經提婆品に八歳の龍女が文珠菩薩の化導を受け、剎那に菩提心を發し不退の位に入り、次で釋迦如來に寶珠を獻じて佛果を成ぜりとい説かる。これが古來女性の成佛を示す例證とされたり。

二 對機說法

又曰く。往生の志ある人の方々より辨阿べんあが許もとに來りて、念佛ねんぶつの法門ぼうもんなら

ひ問ひ候にも、かまへて三万六万の數多からんやうに申給へと教へ候。又經讀むべき人には阿彌陀經など讀み給へと教へ、讀まざる人には唯念佛には過ぐべからずと教ふ。又念佛の義を聞かばや、其義を知らばやなど申す人候へば、其器ならんには、善導の淨土の法門を教へ。又三心の義なども意得まじき人々には南無阿彌陀佛と申事は阿彌陀佛の本願なれば、深く信じて其念佛の數多く三万も六万も申たまへ。さすれば三心も具足して疑なく往生するぞと教へ候事、昔法然上人御傳へのまゝに弘め傳へ候なり。

(一)三心 至誠心(眞實なる心)、深信心(深く信ずる心)、回向發願心(阿彌陀佛の極樂淨土へ往生したいと願望する心)

三 助け給へ阿彌陀佛

又曰く。聖光房が助け給へ阿彌陀佛といふをば、人は尼などのやうにと云ひあひたり。未だ我意を得ざるなり。他力往生とは之をこそ云へ、故法然上人御房は髻鬢もなき十惡の凡夫と身をなして、助け給へと申てこそよけれど仰せられしが、佛加を蒙りて光を拜み、法利を説くを聞き給へり。我等は佛加のなければこそ光を拜まず、法を聞かずと思ひて申居たらんに、助給へとは念々に云ふべきなり。言葉こそ替りたれ、唯同じことなり。

(一)佛加 阿彌陀佛の加祐、即ちおたすけを云ふ。

(二)光を拜み法利を説く 阿彌陀佛の光明を拜み、念佛の功德、利益等を説法する。

四 自力と他力

又曰く。自力他力、聖道淨土といふは、之れ相對して論ずる所なり。自力

といふは聖道門なり。自の戒定慧の力を憑みて出離を求め、多劫を経て漸く成佛す。これを自力と名づく。他力といふは浄土門なり。自の機分は出離するに能はずと知りて、佛願力を頼みて順次に往生する所に他力と名づく。然るに近代の末學浄土の行に自力他力といふ事を立て、念佛にも又自力他力を分別し、或は定散二善を自力とし、念佛を他力とすと云へり。故法然上人は仰せられざりし義なり。況んや自力の念佛は邊地の業となるといふ事、全く聞かざりし事なり。

(一)聖道門 佛教を二大別し、念佛して往生を願ふ教を浄土門と云ひ、浄土門以外の宗派を全部聖道門と云ふ。

(二)戒定慧 之を三學といひ、戒學は戒法即ち佛道修行者の規律心得、定學は禪定にて坐禪靜慮の修行、

慧學は教理の研究を爲すことなり。

(三)出離 解脱といふと同じく、迷妄の生活、煩惱の繫縛を逃るること。

(四)佛願力 阿彌陀佛は念佛を以て人類救済の誓願を立て給ひたれば、念佛する者は佛の誓願力(又は本願力ともいふ)に依りて極樂へ往生するを得。

(五)順次に往生 此世を終るや直に極樂に往生するをいふ。

(六)定散二善 定善とは浄土の有様を観察する修行にて、散善とは父母に孝行、師長に奉事、及び其他の慈善事業、並に稱名念佛等の善根功德をいふ。

(七)邊地の業 邊地とは極樂の傍邊といふことにて、疑心を懐けるものは極樂に生れても、直に道場に入る能はず、長く邊地に止まつて、然る後道場に入るをいふ。今は極樂の邊りに生るゝ善業の意である。

五 三心を易く具するやう

又曰く。故法然上人の常に仰せられ候ひしは、三心を易く具するやうあるなり。決定往生せんずるなりと思ひとりて申す念佛は、誠の心を致さんと教ゆるに、至誠心も此心に納りぬ。又此阿彌陀佛の本願に疑をなさず、決定往生すべきぞと思へと教ゆるに、深心も此内に納りぬ。第三の回向發願心も、申したらん念佛を一筋に決定往生せんずるぞと願へと教ゆるに、回向發願心も此内に納るなり。明かに知りぬ。決定往生せんと思ひ切つて申す念佛に、三心は皆納るなりといふ事を。されば習はざるものなれ共、決定往生せんずるぞと思ひ切つて申し居る程に、三心を具することは易きなりと。かやうにこそ故法然上人の御房は教へ給ひしは年來の間添ひまいらせて聞かざる時も

なし。世の常に聞きみたりし事にてこそ候へ。此頃都にも田舎にも法然上人御房の御弟子とて本草の數多く、いくらともなく念佛の沙汰共しあひたる人候へども、ひとりも故法然上人御房の仰せ候ひし様に、やす／＼といかなる人も念佛によく／＼心いれて申せば、三心は其心に自然に具りて往生するぞといふ人は一人も候はず。

六 往生は三心具足

又曰く。往生は三心具足の念佛の行によるなり。然るに三心は其人の内心の事なれば、他人より具不具は知りがたきなり。此故に念佛の數遍を勸むなり。若し三心具足の人は順次に往生すべし。若し三心具せざる人は來縁を結

ぶべきなり。

(一) 數遍 數多きこと。

(二) 來縁 來るべき因縁といふことにて、今のまゝにては直に往生し難きも、既に佛縁ある人は更に一度縁を重ねて往生を遂ぐるなり。

七 一心と三心

又曰く。往生の爲に其心深き人は虚假の心おこらず。疑心おこらず。不定の心發らず。此故に阿彌陀經往生論には一心といへり。若し心淺き輩が淨土門に入りて之を行じ乍ら虚假の振舞をし、疑心を發し、我わびしまゝに阿彌陀佛助け給へといふ。かくの如くの人のために、別して虚假心を停止せん爲に、別に至誠心を説き、疑心を停止せんために別に深心を説き、不定心を

停止せん爲に別に回向發願心を説き給ひしなり。

八 念佛申すに四種あり

又曰く。念佛申して往生せんと思はん人は、念佛の申様を具に知るべし。念佛申すに四種あり。善導これを四修と釋し給へり。身を清め手を洗ひ、口をすゝぎ香華を佛に參らせて、南無阿彌陀佛と申すは恭敬修の念佛なり。又異餘の勤修せずして、たゞ一脈に念佛申すは無間修の念佛なり。若は一萬二萬にても、若は五萬六萬にても申すは無餘修の念佛なり。此恭敬、無間、無餘の三修を命終るまで申すは長時修の念佛なり。

九 無間修に長短の二あり

又曰く。無間修を修せんに、隙なく申すといはゞ、夜は寝ることあり。晝

は大小便利、或は物食ひなど細々の用事あり。かやうの凡夫の身には何てか此無間修を修すべしとも覺えずといふ人あり。それは易き事を僻様にいふ事なり。無間修に長短の二あり。十遍の内にも無間の意あり。二十遍の内にも無間の心あり。或は一萬遍の内にも無間のことはりあり。況や二萬三萬の内
に於てをや。故に十遍は短の無間修、二十遍は長の無間修。一萬遍は短の無間修、二萬遍は長の無間修なり。

十 誓て中止せず

又曰く。長時修を心得るやうは三萬にてもあれ、六萬にてもあれ、いかほども數を定めて申しはじめて、死ぬるまで怠りなく申すべきなり。もしそ

れを一月二月も申し侍りて其後打捨て、又は一年も二年も申して其後うち捨つるは長時修にあらず。善導和尚此長時修を釋して、畢命爲期 誓不中止 即是長時修とのたまひたり。此文の意は念佛を往生極樂のつとめに仕初る時、本尊の御前にて誓を立て、いふべし。今日只今此つとめをはじめ候。命終る迄つとむべく候なり。命終らざるさき、其中間に更に怠るべからず、我が本尊よくこれを證明し給へ。若此旨に背きて仕初めたる行を遂げずして、空しく徒らになり候ものならば、本尊の御憐みにはづれ、もろくの佛法守護の神々の御罰を蒙るべしと誓を立て候べし。かくの如く誓ひぬれば、我が心ながら我が心の強くなりて、我が信心深くなるべし。此誓をたてずんば心

の弱らんずるなり。此故に善導大師は誓不中止と釋し給へるなり。

十一 日所作の念佛

又曰く。日所作の念佛を闕たらんには尤も申入るべし。日所作を申入れざるは懈怠になる因縁なり。其上日所作の法は最初に佛に誓ひて申初むるなり。されば申入れざるは佛を偽寄奉る咎あるべし。

十二 尋常の念佛

又曰く。本願の乃至十念の念佛は、三種行儀の中には何れの行儀をもて、本意とするやと問はゞ、本願の本意はこれ尋常の念佛なりと答ふべし。其故は別時念佛は上機の所用なり。下機は學ぶといふとも成じ難し。而も本願の

本意は平等の大悲にまかせて一切衆生を化せんが爲に、易行の中の易行を選びて、生因の本願とたて給へる故に、本願の本意は尋常の念佛を願するなり。但し第十八願は總じて三種の念佛に通すべきなり。本意を論ずる時は行住座臥の念佛なり。といふ事なり。

十三 往生してもやあらんと思ふ

又曰く。往生極樂といふことは、あまりにうづ高くいみじき事なれば、我身のいふにかひなく、いやしきに付ても、いかゞあらんと思ふは、之れ却りて一分の信心ともいふべきか、其故は世間にて事のこゝろを案ずるに、あまりに欲しき物を取らせんといふを聞きて、若得ぬこともやあらんずらんと思

ふは、是其物に於て欲心の深きによるなり。それがやうに往生のせまほしきに、もし往生せどもやあらんと思ふは、是かへりて往生の信心ともいふべきか。

十四 往生を願はん人は

又曰く。まことしく往生を願はん人々は、様風流なく唯心に極樂を願ひ、口に南無阿彌陀佛と申て、あしからん業をし給ふべからず。

十五 往生の心ざしまさん人は

又曰く。眞實に往生の心ざしまさん人は、高らかに念佛申て、罪を造らじと思召て、善様の振舞うちして、尋常の人にておはしませ。餘りに過ぎ

たる事も無益なり。人も謗ること雨山なり。

十六 二師の教訓

又曰く。辨阿むかし台山にありて、寶地房に従ひ聖道門を學せし時、淨佛國土成就衆生の義を習ひ、今法然上人に歸して淨土門に入りし後は、選擇本願念佛往生の義を傳ふ。二師の教訓をもて聖教を見るに、義理皆通じて違ふ事なし。然れば單に聖道の人には佛意を辨ふべからず。單に淨土の人にもまた教旨を辨じがたし。聖道淨土兼學の人は能く教の元意を知るべし。夫太上の秘藏を聞かんと欲せば、豫て聖淨の寶鑰を用ゆべし。豈一鑰をもて何ぞよく萬庫を開かんやと。自ら此意を得て一切の經論を拜見するに隨喜の淚禁じ難し。

是れ即ち聖教の深底なり。法門の奥藏なり。佛菩薩の秘術なり。

(一)淨佛國土成就衆生。佛國土を淨め衆生を成就すこ讀み、佛國土は吾々人間社會の事なれば、此の

社會を淨化して、民衆をして其人格を向上完成せしむるを云ふ。

(二)選擇本願念佛往生。阿彌陀佛が一切の行業の中より念佛の一行を選擇して往生の業因とすこ誓約

(即ち本願)をなし給ひしこと。

十七 念佛と六波羅密

又曰く。善導和尚往生の行業功つもあり徳いたりて現身に念佛三昧を發得し給ひし時、まのあたり阿彌陀佛より念佛三昧はこれ往生極樂の最要なりと傳へ給ひて、一向專修の行をたて給へり。又みづから淨土の底をきはめ、念佛の源をつくして、往生の業はたゞ念佛の一行なりと悟り得給ふことは、無量

壽經には一向專念彌陀佛名と宣べられ、阿彌陀經には離れ難き生死を離れしめんが爲に、南無阿彌陀佛の一法を説き給ふ。觀無量壽經に定散兩門三福九品の行を、まちくくに説き給ふといへども、未來流通のため阿難尊者に付屬の時は彌陀の名號をもて、これを付屬し給へり。聖教の習ひにて未熟の機のために、諸法を各別に明すと雖も、時いたり機緣熟すれば萬法をすて、たゞ一法なり。これによりて善導の意は念佛の一法を以て萬法を納め給ふなり。既に念佛の一行をば念佛三昧と名づく。念佛三昧は六波羅密の中、禪波羅密なり。此禪波羅密に五波羅密を納むる義あり。惣じて六波羅密互に納まるなり。然れば念佛三昧即ち六波羅密を悉く行するなり。此故に善導和尚は彌陀

名號を以て一向專修と一法に詮じ給ふなり。これ萬法を選び捨て、一法の勝れたるをとるなり。

(一)三福。世福(父母に孝養し、師長に奉事し、及び不殺生等の十善業)。戒福(三歸を受持し、衆戒を具足す。行福(菩提心を發し、深く因果を信じ、大乘經を讀誦し、行者を勸進す)

(二)九品。淨土に三輩にて上中下の三階級ありて、其各に亦上中下の三品あり。上品上生、上品中生、上品下生等なり。之れを合せて九品とする。

(三)未來流通。後世に弘むること。

(四)付屬。委囑すること。

(五)六波羅密。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六種の修行をいふ。

(六)禪波羅密。禪定波羅密にて、嚴重なる法則により精神を統一し三昧境に達する修行。

十八 みな南無阿彌陀佛

又曰く。故法然上人曰はく。善導の御釋を拜見するに、源空が目には三心も南無阿彌陀佛、^(一)五念も南無阿彌陀佛、四修も南無阿彌陀佛と見ゆるなり。

(一)五念。は五念門の事にて、禮拜、讚嘆、作願、觀察、回向の五種修行門をいふ。

十九 法然上人の遺誓

安貞二年、西海道筑後國善導寺沙門辨阿彌陀佛へ諸國修行の人々の中に、問て云はく、法然上人念佛往生の事をば眞實に如何様に仰せ候ひしぞ、此事覺束なさに承りて、我もふつと往生を思ひ候はん。又念佛往生の志深く候はん人にも語り傳へ侍らんと思ひ候。ありのまゝに誓言をたて置きて、語り傳

へましく候へ。穴賢あなかしこく、承り候はん。

其事申置候はん。此頃(一)本ある人も、今出来る人も、故法然上人の教とて念佛の事申あひて候事の、皆かはりて申候も承り候。自も残りの命いのちいくばくも候はず。心が、りに候て、心憂き事と思ひ候。尙世に申置度候事にて候。うれしく仰おほせられたり。申置候はん。それにも人にも、念佛の志深く候はん人には、傳へ置かせ給ひ候はゞ殊ことにうれしく候べし。

(一)本ある人 法然上人御在世中より居る人々

(二)今出来る人 最近京都に於て噂うわさに上る人々

故法然上人御房の仰候ひしは、もろこし我朝わがてうにもろくの智者達ちしやだちのさたし

申さるゝ觀念くわんねんの念にもあらず。また學文がくもんをして念佛の心をさととりて申念佛にも候はず。唯往生極樂せんために、南無阿彌陀佛と申て、疑うたがひなく往生するぞと思ひとりて申より外ほか、別の事候はず。但し三心四修と申事の候は、皆決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ひとる心に納なれり。此法師ほうしもよくく習ひ候て、後のちに思ひ合せ候。故上人御房ごぼうの仰られ候には、南無阿彌陀佛と申は、決定して往生する事なりと信じとれとこそ候ひし。此外に奥ふかきことのあるぞとも、上人御房の仰られて候事に候はゞ、阿彌陀佛釋迦しやかの御罰おんばつを蒙り候べし。又念佛守護ねんぶつしゆごの梵天帝釋ぼんでんたいしやくの御罰おんばつを蒙り候はん。念佛を信じ候はん人は、たとひ一代の御法を、よくく學し給ひたる人なりとも、不覺ふかくの身とな

りて、あまにふだうむち尼入道無智の輩に、ごもがら我身をおなじう同して、ちゆうまひ智者の振舞をながくせずして、た
ゞ南無阿彌陀佛と申てかなふところ、こほうねんご故法然御房はおほ仰られ候ひしが、みづか
らもきき聞つめ、上人御房のたしか慥におしへおき教置給ひし事、せんさ千度もまんさ萬度もかくのごとし。

此安貞二年の法語は深草欣浄寺苦厭上人豊臣秀頼公の二男なりとそ直筆を予傳持せり。或いはく
國師御直筆清浄華院寶庫にありと。なほ尋ぬべし。

鎮西法語抄 畢

記主禪師垂誠

鎌倉法語抄

記主禪師は石見國三隅の庄の御誕生にて諱を然阿良忠上人と申しました。上人も初めは天台宗で御修行遊ばされましたが、三十八歳にて鎮西國師の門弟となり、浄土の宗義を一々口授相傳なされ、其後關東諸州を御巡錫なされて各地の武家豪族を化導し、多數の門弟を教育する傍ら、五十餘部の宗書を著述なされ、今を時めく鎌倉幕府を中心に大に宗勢を振ひ、七十八歳の老年に至つて再び上落し、宗祖の遺風を宣揚し、弘安十年七月六日八十九歳を以て鎌倉光明寺で御入寂になりました。昭和十一年は六百五十年忌に當りますが、總本山に於ては一年遅らせて明年三月他の二上人と併せて御遠忌を勤めます。永仁元年、伏見天皇は記主禪師と諡號あらせられました。

鎌倉法語抄

一 大權の垂迹

(一) 用意問答云。抑近來法然上人此界に出で、念佛を勧め給ふ事おはしき。
(二) 是大權の垂迹なり。弟子良宿因ありて其流を汲めり。
(一) 用意問答 詳しくは浄土宗行者用意問答三といひ、記主禪師の御作なり。
(二) 大權の垂迹 佛菩薩が衆生救済の爲に人間として此世に現はれたまへる姿。
(三) 宿因 宿世の因縁、即ち前世からの關係。

二 唯相傳の一筋を信じて

又云。問ふていはく。念佛には三心を具すべしと見えたり。然るに人々の義道まぢくにかはりたり。相傳口決の義勢を以て、往生極樂の指南に備へ

んと思ふ如何。答へて云ふ。實に佛意測りがたく、教文明めがたし。他の義の善惡を判ぜん事は、かたぐもつて憚りあり。故上人水の義趣を違へず云はるゝ人少くなりしかば、還りて古の義と名づけて、皆廢りたる世になりたる事は、大に痛ましき事なり。誠に故上人は世も少し上り、見濁も輕し。人に取りて又道心も深く、智慧も深ふして、みづから出離の道を歎き、久しく一代藏經を披き尋ね、三國往生の迹を鑑みて、終に善導の釋に歸し給ひ、本願念佛出離の最要なりと知りて、三心の釋文に眼をさらし心を留めて料簡し給ひけん。定めて和尚善の意にもかなひ、遠くは釋迦彌陀二尊の佛意にも違はじとこそ推量られて候へ。されば其教に隨ふ者、愚痴十惡の輩の、つやく

三心の名をだにも知らぬが、平に念佛して臨終に奇瑞まであらはれて、往生するもの都鄙に聞え候なる。然らば他人の義をば、善とも惡しとも思ひ入れずして、唯相傳の一筋を信じて念佛し、往生を遂げて、穢土に還り來りて、又こそ此法を一切の人にさづげんと思ふべきなり。

(一)相傳口決の義勢 師匠より弟子へ口づから傳へらるゝ一宗の奥義教旨。

(二)見濁 末法の世になり人々の思想が墮落して益々利己主義なるを云ふ。

(三)一代藏經 釋尊一代に説き給へる一切經。

(四)善導の釋文 善導大師が觀無量壽經を解釋されたる同經疏四卷のこゝ。

(五)三心の釋文 觀無量壽經の三心を解釋されし文中に「一心專念彌陀名號云云」の三十四文字あり。

法然上人は此の文によりて彌陀本願の深旨、凡夫往生の要道を悟得されたのである。

三 三心の義

相傳の義に云ふ。觀經に云はく。若有衆生、願生彼國者、發三種心、すなはちわうじやうす 即便往生。なんらをかさんごなす 何等爲三、一には至誠心、二には深心、三には回向發願心なり。さんじんをぐするものはかならずかのくにうまねんごねがはさんじゆのこころをおこすべし 具三心者、必生彼國といへり。此三心は念佛の安心、往生の正因なり。其意を知りて念佛を行ずべし。一に至誠心とは眞實の心といふ事なり。凡そ人の心に眞あり偽あり。君臣夫婦皆その心あるが如く、往生を願ふ心までも此二つあり。其偽れるを虛假心と名づく。内は名利の心に住しながら、外に往生を願ふ由をもてなして、(一) 三業精進の人よと云はるゝを、虛假心といふなり。此人は往生すべからざるなり。實あるをば至誠心と名づく。内外相應ひて、

三業の勤、外を飾らず、眞實に往生の爲と思ふを至誠心といふなり。但し時として念佛を申せども、異事を思ふ事あり。それは起行の懈怠にてぞあるべき。至誠心の欠けたるにはあらず、偽の心にて行ずる時ぞ、虛假にはなる也。虛假の者は往生せず、眞實の者は生ずることは、譬へば不忠の臣は、國の傾く時天子に背き、葉の落つる木は歳の寒き時色變る。扱忠臣は國の危きに顯はれ、貞松は歳の寒きに顯はるゝが如し。虛假の者は終りに臨んで往生を得ず。至誠心具足する者は、臨終の危きに及んで往生を遂ぐるなり。

二は深心とは、深く信じて疑はぬ心なり。是に二つの信あり。一には自身はこれ罪惡生死の凡夫にして、(二) 曠劫より以來常に没み常に流轉して、出離の

縁ある事なしと深く信ず。これは自力にては生死を出がたしと、我身の程を信ずるなり。二には阿彌陀佛四十八願を成就して、かゝる衆生を助け給ふと、深く信じて疑ひなく、慮ひなければ、彼佛の願力に乗じて往生すと信ず。阿彌陀佛五劫に思惟して大悲の肝膽を碎いて、案じ立給ふ四十八願の本意は、たゞかゝる自力にて、生死を出がたき衆生を哀み給ふと心得れば、彼願力に依て生るゝと信じて、疑はぬを深心とはいふなり。たとへば我爲に善き人の而も虚言せぬが、若我こゝにあらば悪かりぬべきを教へて、その路を行け、行かんにはいかなる道あり。行つかば目出度處あり。かしこに住せよと、くれぐれ念頃に教へたらんを憑みて行かんに、又人有りて然る道なし。さる所

なしといふとも、前の人の我を欺くべき様なき道理をもちて、とかく疑ふまじきが如く、三界の慈父にてまします釋迦佛の説、吾等が悲母にてまします阿彌陀佛の願を發して、凡夫の苦しみをぬきましますと聞てん後は、塵ばかりも疑ふまじきなり。

三に回向發願心とは、念佛を先として一切の善根を極樂に回向するなり。過去と今生との善根を、一つも残さず回向すべし。昔は何の爲にも思へ、今はとりかへして往生の爲と思ふべし。但し念佛の行者となりなん後、殊更に(五)雜行を修し加へて、回向せよとにあらざ、唯はじめより、用ひたる善を回向するなり。是を回向發願心といふなり。

此三心を具して念佛せん者は、彌陀の本願に相應して、必定して往生すべし。若一心もかければ生るゝことを得べからず。よくよく我心を顧みて、三心の具と不具を知るべきなり。又三心を具したらん人は、常に念佛の申たく、數遍のせられんずるなり。故に疏に云はく、一心專念彌陀名號 行住座臥 不問時節久近念々不捨者 是名正定之業 順彼佛願故といへり。立居起臥に忘れず、念々に念佛申せといへり。念々とは本意を釋するなり。凡夫のならひ、いかにも念々間なき事はあるまじ。それを隨犯隨懺とて、あしき事を思へども、念の内、時の内、日の内に思ひ返しなば、尙往生すべしとなり。

(六) 又觀念法門には一萬、二萬、三萬、四萬、五萬、乃至十萬を勸めて、三萬

已上を上品上生の人と定められたり。必滅遁れがたし、最用意すべきものなり。先師西鎮は此定に勤められ候ひき。又法然上人は念佛を受申す人には、在家は一萬已上なり。六萬十萬を申さんは左右に及ばず、出家は二萬已上なり。六萬十萬を申さんは云ふに及ばずと勸め給ひき。然るを後の人、數遍を鏗とせずんば、上人のすゝめに違へりと先師西鎮は申されき。又同じ一門の中に、至誠心に異義を存じて、還りて上人の義を破る事あり。痛ましいかな、相傳と號しながら、祖師に背き奉る事、其人の爲には一分謗法の罪となりぬらんと覺え候。

(一) 三業 身業、口業、意業の三をいふ。身體の所爲、言語、思慮分別等の事なり。

(二) 曠劫。劫とは非常な長時間を指し、今も遙かなる大昔の意なり。

(三) 常に没み常に流轉し。生死の苦海に沈み地獄、餓鬼、畜生等の六道に生れ變り死に變り輪廻せること。

(四) 五劫に思惟。劫に大中小の別あり。人間の壽命を最長八萬歳になし、百年に一歳づゝ減じて遂に十

歳に至り、次で十歳より百年に一歳宛増して八萬歳に至る間を一小劫と云ふ。而して八十小劫を中劫となし、八十中劫を大劫とす。今五劫といへるは五大劫の事にて、阿彌陀佛が一切衆生を救済する法を探求するため五劫の長時間を費し給へり云ふ。

(五) 雜行。極樂往生の正行(五種正行)にて讀經、觀察、禮拜、稱名、讚歎供養の他の行爲を雜行と呼ぶ。

(六) 觀念法門。善導大師の著書なり。

(七) 謗法の罪。正法を誹謗するの罪にて、五逆と共に極重罪にして、阿彌陀佛の本願にも是等の罪を犯せるものは念佛往生に除外せられてある。

四 破戒人の往生

又云。佛弟子に道俗あり。俗といふは在家也。^(一)五戒を持ちて念佛すべし。

道といふは出家也。^(二)十戒具足戒を持ちて念佛すべし。^(三)略問曰。若然らば破戒無

戒の者は念佛すとも往生はかなふまじきや。答云。破戒の人の中に二つ有り。

一には止惡修善の道理を存しながら、貪瞋に逼られて戒品を破る者あり。二には惡見を起して他力本願を信ぜんものは罪惡を恐るべからずと存じて、恣に惡を作る人あり。此二人の中に後の人は往生すべからず。前の人は往生すべし云。

(一) 五戒。不殺生、不偷盜、不邪淫、不妄語、不飲酒。

- (二十)戒 前の五戒中に不塗飾香髮、不歌舞觀聽、不坐高廣大床、不非時食、不蓄金銀寶の五を加ふ。
 (三)具足戒 比丘比丘尼の受くる戒にして二百五十の戒品あり。

五 念佛にすけをさすまじ

又云。相傳して云。念佛の往生をば構へて輔をさすまじきなり。家の弱にこそ輔をばさせ、たとへば戒律を護る人は、戒品を持たずんば、念佛ばかりはかなはじと思ひ、理解を貴む人は、事の念佛ばかりにてはかなはじなどと思ひ、眞言持經の者は、皆己が法を本願念佛のすけとして本願を疑ふなり。

六 先師の定言

(一) 決答云。先師西の定言云。助たまへ阿彌陀佛と云云。

有時予に示して云。凡諸師の習ひ、皆最要の一言あり。善導は本願念佛。惠心は因明直辨なり。辨阿は助給へ阿彌陀佛と、心にも思ひ口にもいふなりと。實なるかな此言。賢いかな此心。仰ひて先師の口決を顧みるに落涙千行云。助給へと思へば、滅罪の邊も籠り、生善の邊も收まり、出離の方もこもり、往生の方も收まれり。本願の至心信樂 彌疑殆なきものと云云。

- (一) 決答 記主禪師の著述されし決答授手印疑問鈔をいふ。
 (二) 因明直辨 往生淨土の行こして餘法は因みに之を明し、本願念佛は直接に之を辨す。

六 名號の徳

又云。先師西云。故上人水。先づ名號を唱ふれば、名號の徳として妄念自

らやみ、願心カノコ自ら生ずるなり。何況や本願の元意は、亂心ランシンやめがたき者を化せんが爲なり。妄念マウネンの息め難きに付ても、一向に本願をあふぐべし。散亂サンランの静めがたきにも一向に名號ミヤウガウを唱ふべきなりと、仰せられき。

八 三心を一時に具す

又云。先師シ西シ口傳クツデンせられ候ひしは、念佛申せば往生するなりといふ事を聞きて、其ことばをゆるす時、三心を一時に具するなりと。

九 三心具足の自覺

又云。先師シ西シ鎮チンの仰候は、故上人コウジン水宣スイケンひしは、往生のために念佛を申す時、此念佛の行を心に大要ダイヤウなりと覺えて、行ずるにつきて、勇イサミありて、常に念佛

を申さんと欲するものは、我身ワガミすてに三心を具したりと思ふべき也。

十 聖光上人の念佛

又云。鎮西チンシ御念佛ミゴブツの中には、時々助給タサケタマへ阿彌陀佛アミトブツと雜言マヤヘ仰せられ候。如法ニヨボウ勇猛ユウマウに見えさせ給ひ候ひき。八旬ハツジュンの老體ラウタイ、寒熱カンネツの時にいたりても、少しも怠オコタらず御座候なり云云。

十一 この故實によりて三心を具す

(一) 一言芳談イツンホウタン云。然阿上人ゼンアウジン云。三心を具せざるものも、おして決定ケツゼイ往生ワウジヤウと思へば、此故實コココジツによりて、はじめて三心を具するなり。

(一) 一言芳談、著者不明、但し鎌倉時代の作。法然上人並に上人の門流を汲める人々三十餘師の法語を集めたるものなり。

十二 淨土宗の元意

又云。凡淨土宗の元意、助たまへ阿彌陀佛とおもふにすぎず。

十三 三心とは

又云。いつはらざる心をもて、佛の本願を信じて、まさに往生せんとおもふ。是を三心といふなり。

十四 兼信因果

又云。かなしきかな。因果を信ずるものは、他力の信よわく、本願を信ずる者は因果の理ゆるし。こひねがはくは、専ら本願を信じ、かねて因果を信ぜよ。則ち佛意にかなひて往生を遂ぐべきものなり。

十五 見佛の思ひ

又云。別時まではなくとも、六時禮讚の次の念佛、心すまん時などは、別に用心して見佛の思に住すべし。

(一)六時禮讚 毎日晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜の六時に勤行をなし、其都度善導大師の作り給ひし禮讚を唱誦する。

十六 聖光上人と六時勤行

又云。聖光上人は談義の最中にも、日中の時來れる時は、一文一句を誦し、さして、やがて阿彌陀經を初め、禮讚念佛を行じましゝき。同聞の聽衆も、こゝろならず各別に禮讚をしき云云。

十七 他力の出離

淨土大意鈔云。三學の修行に堪えざる衆生、惡道の生死まぬがれがたし。

(二) 大聖是を哀みて、淨土に往生する門を説き給へり。此門には唯信佛の因縁をもて、佛願力に乗じて往生すれば、他力の出離と名づく。萬劫の功業を修せよとも説かず。(三) 三祇六度を行ぜよとも明さず。上は一形下は一念、いくばくの功なしといへども、阿彌陀佛五劫思惟の四十八願、兆載永劫の六度萬行を、吾等に與へ給ふが故に、往生の萬行虚しからず、雪山に身を投ぜよともいはず、命を捨よともいはず、花のもと月の前、雨の夜雪の朝、草庵の内靜なるに、窓の前に西を思ひ、御名を唱ふれば、無始の霜露は舌の上に消え、順次の蓮台は念の内に定まりぬ。

(一) 淨土大意鈔 記主禪師の御著作なり。

(二) 大聖 釋迦牟尼世尊の事なり。

(三) 三祇六度 三祇は三阿僧祇劫の略にて三無數劫の事である。六度は前に出せる布施、持戒等菩薩の修行要目なり。

(四) 一形、一念 一形は一盡形壽にて一生涯、一念は六十刹那をいふ。

(五) 兆載永劫 載は歳なり。即ち億兆の歲月、永遠の長劫といふ意味なり。

十八 正行と雜行

又云。五種正行は阿彌陀佛の御事を行ずる故に、少々厭離穢土 欣求淨土の心弱けれども、行の徳として心彌陀に係るが故に生ずるなり。所詮心の重く心のかゝる所へ生るゝなり。雜行は極樂に疎きが故に修すべからず。正行は正助二業ともに修すべし。但し助業は傍なるべし。又修せざる人もあるべし。

し。稱名して専ら往生を期すべし。

(一) 厭離穢土 穢土即ち邪惡に満てる此の世界を厭ひ捨つ。

(二) 欣求淨土 穢に反對なる極樂淨土に生れんことを欣ひ求む。

十九 聲は念をおこす

四十八願の中に極樂に生ずべき生因を願じ給ふことは、たゞ第十八願の念佛往生の願に限る故なり。仰ひて弘願の心を按ずるに、萬行の中に勝れたる事念佛に過ぎたるはなし。其故は自ら唱ふる聲を吾が耳に聞き、心に彌陀を思ふ。その心に勧められて、又口に唱ふ。念は聲をすゝめ聲は念をおこして、常に彌陀を忘れず行ずるなり。此故に萬行萬善の中に、念佛の行第一なり。

忝くも佛本願のこゝろも此故かと覺えて、感涙おさへがたし。釋迦慇懃に勧め給ひ、諸佛強て證し給ふ。これを思ふべし。

二十 此度往生とげずして

又云。觀經の下品下生の文は、五逆の罪人なる上に、死苦來りて責る時なれば、深く佛の功德を念じたるにも非ず。たゞ勸に依りて名號をとなへたれば往生すとは明せり。誰かは彼の望を絶んや。かくの如き下機を捨てぬ念佛の法に値ひながら、或は惣てとなへず、或は唱ふといへども思ひ入れねば、虚假の行となれり。此度往生をとげずして又三途の舊里にかへりなば、曠劫多生の恨なるべし。宿因拙くして、進みがたしと云ふとも、今生には策ちて

是を勤むべし。

(一)三途 地獄道と餓鬼道と畜生道をいふ。

二十一 前念に命終後念に往生

又云。禮讚云。仰ぎ願くは一切の往生人、善く自ら思量せよ。既によく今身に彼國に生れんと願ふものは、行住座臥かならず心を勵まし、おのれを責めて晝夜廢する事なく、命の畢るを期とせよ。上一形にありては小苦に似たる如なれども、前念に命終して後念に即ち彼國に生じ、長時永劫常に無爲の法樂を受けて、乃至成佛まで生死を逕ざるは、豈快にあらずや、知るべしとのたまへり。此文は念佛修行の龜鏡なり。心腑に收めて忘るゝことなかれ。

二十二 仰ひて願文を見れば

決疑抄云。仰ひて願文を見れば、涙雙眼にうかぶ。萬劫に希に聞き、今始めて値ひたてまつる。彼寶刹に詣らんこと、今幾ばくの曉夕ぞや。

南無阿彌陀佛

(一)決疑抄 記主禪師著「選擇傳弘決疑抄」なり。

(二)願文 阿彌陀佛の本願の文。

鎌倉法語抄 終

法然上人御法語

問ていはく、心の澄む時の念佛と、妄心の中の念佛と、その勝劣いかむ、答ていはく、その功德ひとしくしてあへて差別なし。

疑ていはく、この條なを不審なり。そのゆへは、心のすむ時の念佛は、餘念もなく一向極樂世界の事のみおもはれ、彌陀の本願のみ案せらるゝがゆへに、まじふるものもなければ、清淨の念佛なり。心の散亂する時は、三業不調にして、口には名號をとなへ、手には念珠をまはすばかりにては、これ不淨の念佛也。いかでかひとしかるべき。答ていはく、このうたがひをなすは、いまだ本願のゆへを知らざるなり。阿彌陀佛は惡業の衆生をすくはんために、生死の大海に弘誓の船をうかべ給へる也。たとへばおもき石、かろきあさがらを一つ船にいれて、むかひの岸にとづくがごとし。本願の殊勝なることはいかなる衆生も、たゞ名號をとなふるほかは、別の事なき也。

附 録

正宗國師垂誠

筑紫法語抄

筑紫法語抄

一、死の一字

一言芳談云。聖光上人云。八萬の法門は死の一字を説く。然れば則ち死を忘れざれば、八萬の法門を自然に心得たるものにあるなり。

(一)八萬の法門。釋尊が一代五十年間に、説きたまへる無数の教法をいふ。印度に於ては最大多数を顯はすに、多く八萬の言を用ゆ。

二、往生と厭欣心

用意問答云。問曰。たとひ念佛すとも穢土を厭ひ、淨土を願ふ心深からずば、往生かなふべからずと申は如何。答云。先師(聖光)の云。念佛は本願の

行なれば、たとひ厭欣の心よはくとも往生すべきなり。それも餘行の厭欣に望めて、それほどならずとも生因の願力強縁となる故に、餘門には似ずと云事なり。死は念々に近づく。日々に厭欣の心を増ことは、紙を一帖置きて一枚づゝつかへば、次第に少くなる様に、死期の近づくを知りて、且は佛にも祈り、且は練磨すべしと申されき。

(一)生因の願力強縁なる。吾等が往生極樂の因たる阿彌陀佛の本願力が又強き縁ともなる。

三、三心の意義

勅修御傳第四十六卷云。聖光上人製作の念佛修行門に云。世の中の念佛者、故上人の御流とは申あひて侍れども、上人の御義にはなかりし事どもを、

申込みたり侍るこそ、不便の次第に侍れ。故上人辨阿におしへ給ひしは、善導の御心は、浄土へまゐらんと思はん人は、必ず三心を具足して念佛を申べきなり。一に至誠心と云は、まことしく往生せんと思ひとりて念佛を申なり。二に深心と云は、我身は罪惡生死の凡夫なり、然るに彌陀の本願のかたじけなきによりて、此念佛より外には、我身のたすかるべきことなしと、かたく信ずるを申なり。三に廻向發願心と云は、唯ひと筋に極樂にまゐらんずるための念佛なりと思ふをいふなり。これぞ法然上人より習ひつたへ奉りたる三心にて侍る。此外またく別の様なきなり。故上人の仰られ候ひしは、在家のいとまなからん人は、一萬二萬などを申べし、僧尼などゝて、さまをか

へたらんしるしには三萬六萬などを申べし。いかにも多く申にすぎたる法門はあるべからず。詮ずるところ此念佛は決定往生の行なりと信をとりぬれば、自然に三心は具足して、往生するぞと、やすくと仰られ侍しなり。若これ習はぬことを、習ひたりといひ、仰られぬことを仰られたりと申侍らば、三世の諸佛、十方の菩薩、ことには頼みたてまつる所の釋迦彌陀觀音勢至、善導聖靈、念佛守護の梵天帝釋等の、御あはれみなくして、現世後世かなはぬ身となり侍らん已上略抄

- (一) 辨阿 聖光上人の號。
- (二) 善導 隋の大業九年安徽省泗州に生れたまひし專修念佛の祖師にて、我が宗祖法然上人は偏に善

導大師の遺書に依り淨土宗を開きたまへり。唐の永隆二年三月六十九歳にて御入寂。

四、助けたまへ

決答鈔云。辨阿は助けたまへ阿彌陀佛と、心にもおもひ、口にもいふなり。

五、解行は眞實に

一言芳談云。聖光上人云。凡夫は歴縁對境の名利をば發すべきなり。但し往生の解行につきては、一向眞實なるべし。

六、一向專修

一言芳談云。聖光上人云。篋をたむるに、片目をふさぎて、よくためらるゝやうに、一向專修も、横目をせざれば、とく成なり。

七、學問よりも念佛

一言芳談云。聖光上人、學問を不受して云。日來學し給へる人々だにも、捨てこそ念佛をば申されけれ。さばかりをしき暇に、念佛をば申さずして、學問をすること無益なり。念佛を申て、いとまのひまには、さもありなん。

八、曉の寢ざめの床

勅修御傳第四十六卷云。聖光上人つねの述懐には、人ごとに閑居の所をば、高野粉河と申あへども、我身には曉の寢ざめの床にしかずとぞおもふと。

九、念死念佛

また安心起行の要は念死念佛にありとて、常の諺には出る息、入る息を待たず。入る息、出る息を待たず。たすけたまへ阿彌陀ほとけ、南無阿彌陀佛

とぞ申されける。

十、死期の近づきたる

一言芳談云。聖光上人云。日來隨分ひころすいぶんに後世ごせをおもふ様なるもの、行業ぎやうごふなど、退轉たいてんすることあれば、死期しごの近づきたると思ふべきなり。

十一、臨終の用心

聖光上人臨終りんじゆう用意ようい云。念佛ねんぶつの行者ぎやうじや、臨終りんじゆうの時を豫かねてより、最用心もつごころようじんすべきなり。最後臨終さいごりんじゆうの一念いっぴんに、生處しやうじよの善惡ぜんあくを定む。もし惡念あくねんを起して、顛倒てんだうすれば惡道あくだうに墮だす。此たび往生おんじやうを遂げずんば、またいつをか期ごせんや。故かにもろこしの善導ぜんだう和尙わしやう、道綽だうしやく禪師ぜんじ等の往生おんじやうの先達せんだち、みな臨終りんじゆうの用心ようじんを示したま

へり。和尙わしやうのいはく、たゞちに氣消え命盡いのちつき、識冥界しきみやうかいにいたるを待ちて、まさはに始めて念佛ねんぶつし、鐘かねをならすこと、恰あたも賊ぞくさりて門かどを閉とすが如し。何事なにごとをかなさむ。云云。またいはく、眷屬けんぞく六親ろくしん等、もし來りて看病くわんびやうせば、酒肉しゆにく五辛ごしんを食くすることなかれ。もし食する人あらば、必ず病人びやうじんに向ふことを得えざれ。すなはち正念しやうねんを失うふて、鬼神きじん交亂かうらんし、病人びやうじん狂死きやうじして三惡道さんあくだうに墮だすと云云。禪師ぜんじのいはく、もし倣ならひにあらざれば、懷念くわいねんなんぞ辨べんずべけむ。云云。日本にっぽんの千觀せんくわん内供ないく、惠心ゑしん先德せんたくも臨終りんじゆうの用意よういをしめし給ふ。内供ないくのいはく、命いのちまさはに終おはらんとせば、先づ妻子眷屬さいしけんぞくの愛あいをすつべし。云云。先德せんたくのいはく、患うれに染せんはじめより來りて病床びやうしやうを問とひ、幸さいはひに勸進くわんじんをせよ。云云。しづかに此事このことを按あんず

るに、凡そ臨終の善悪は、執愛の有無による。この執愛、ことさらに多しといへども、束ねてこれをいへば、三種に過ぎず。一に境界愛とは、男女、子息、夫妻、縁友、處居、住宅、金銀財寶、これらの境界におゐて愛執を起せば、出離を碍へるなり。たとへば鐵の繩を腰に纏ふて、解がたく切がたきがごとし。二に自體愛とは其身の器量、學問、才能、官祿、名聞、肌膚、容貌等、その品にしたがひ、其分に應じて、己が身に愛執を起せば、出離を障るなり。たとへば嚴をいだひて、淵に入るがごとし。三に當生愛とは、命終りて後、生るべき所を愛するなり。もし墮獄する人も、初めは地獄と思はずして、蓮華池の思ひをなして、愛を起して直に趣くと。云云。恐るべきことな

り。あるひはまた、女人は皇后、皇妃を願ひ、五障のつたなきことを愛す。男子は國王、大臣を願ひ、有爲苦のあることを愛す。たとへば獄を出づるもの、かへりてまた獄をねがふがごとし。云云。往生をねがふ人は、平生あらかじめ愛執をいとひ、粗著心を離るべし。愛執の深きは、厭離の心なくして、欣求のこゝろ弱きゆゑなり。厭欣のこゝろ強ければ、おのづから死を怕れざるなり。死を怕れざれば、臨終顛倒せず。顛倒せざれば、往生の素懷を遂ぐべし。一度往生の人は蓮華より化生し、壽命無量にして、無常遷化の愁なし。眼に入るところは、阿彌陀佛紫磨黄金の膚、耳にきく所は、世尊の轉法輪の聲、國土の莊嚴、水鳥樹林のひびきまで、佛事ならずといふことなし。三三

(十四) 六通をもちて、十方淨土に往來し、心にまかせて諸佛を供養し、或は還來穢國し、縁にしたがひて、群生を化度する等の、自在を得ること、誰の人かこれを願はざらむ。その生因を尋ねれば、彌陀本願の力を頼み、口稱の一行を修するばかりなり。これ易行易修にして、凡夫出離の要路、これにすぎたることなし。かくのごとく欣求進修すれば、自然に愛執をはなれ、任運に業障を除滅して、佛の迎接にあづかり、臨終正念にして彼國に生るゝこと、疑なきものなり。

- (一) 道綽禪師 善導大師二十九歳の時より數年間、此の禪師に師事して念佛の法門を相傳し給へり。
(二) 冥界 死後の世界。

- (三) 五 辛 木葱、葷葱、蒜、興渠、蘭葱にて、にら、にんにくの如き五種の臭氣強きもの。
(四) 正 念 明瞭なる意識。
(五) 鬼 神 今は魂魄のこゝ。
(六) 三 惡 道 三途(地獄、餓鬼、畜生)に同じ。
(七) 禪 師 道綽禪師のこゝ。
(八) 千 觀 內 供 千觀は攝津の人、天台宗の傑僧にて内供養十禪師の公職に補せられしより内供といふ。永觀二年八月、六十六歳にて入寂す。
(九) 惠 心 先 德 惠心僧都のこゝ。天慶五年大和に生れ、天台宗に入り、深く他力念佛を信じ、往生要集六卷等著述多し。寛仁元年六月、七十六歳にて入寂す。
(十) 障 女人は罪業深きため梵天、帝釋、魔王、轉輪聖王、佛身の五位に達する能はずといふ。但し女人は精神の怯懦なるをいふなり。

(十一) 紫・磨・黃・金。紫色の黄金。

(十二) 轉・法・輪。法輪を轉すこいひて、説法を爲すこい。

(十三) 三・明。宿命明（前世の生死の相を知る）、天眼明（來世の生死の相を知る）、漏盡明（現世の煩惱を斷ず）の三證明。

(十四) 六・通。天眼通、天耳通、他心通、宿命通、身如意通、漏盡通なり。

(十五) 任・運。自然に云ふこ略ほ同じ。

十二、祖恩報謝と回向

聖光上人、或人へ答へ給へる消息に曰。日々の念佛御相續候が、佛祖の御報謝にて候。此外に別義無く候。六親萬靈は平等施一切等と御回向候ときは、彌陀如來の御助けに豫り候と經に説きたまひ候。云云

筑紫法語抄終

勢觀房源智上人述作

選擇要決 壹節

勢觀房源智上人は平重盛公の御孫であるが、十三歳の時元祖大師のお弟子となり、爾來十八年間お側に奉仕なされ、大師の御入滅に際しては有名なる一枚起請文を授かり、又堂舎、什具等悉く御相續になりました。大師御入滅後も京都に留まり、専ら自行化他にお盡しなさいました。暦仁元年（嘉禎四年）十二月十二日五十六歳で御遷化遊ばされました。明年は七百年忌に相當いたします。上述の如く三上人は九州、關東、京都と恰も天下を三分して、それ／＼の地に他力本願念佛の宗旨を宣揚遊ばされ、元祖大師の遺教は屢々乎として海内に流布するに至つたのであります。而もその三上人様の御遠忌が殆ど同時に來るのでありますから、總本山に於ては昭和十二年三月六日より同十二日まで一週間、全國淨土宗の僧侶並に檀信徒を會して、盛大なる追恩の法要が執行されます。さて今此書は勢觀上人が元祖大師の滅後、大師の教導を受けた舊門下であり乍ら大師の教に悖つた説を立てる人が少くないのを歎き、大師の御著作「選擇集」に基いて論破なされたものであります。

選擇要決の一節

凡そ臨終の善惡を以て、當生の苦樂を定むることは、是れ如來の金言なり、誰人か之を疑慮せんや。是故に慧心は故に臨終の行儀を作つて、専ら最後の正念を勧めたまへり。往生要集に云はく、念佛功積り運心年深き者は命終の時臨みて大喜自ら生ずと。又先師（法然）の常の言に云はく、武士と上人とは多く最後に到りて耻辱を顯はすと。明に知んぬ、臨終正念を以て往生の契券と爲ることを。

靜に思へば念佛の行者は宿善の誘ふ所、無上の功德日々に積集し、無量の罪業念々に消滅す。聖衆外に護り災障内に除く。其命終に至りては則ち如來

迎接し菩薩胡跪す。諸の邪業繫能く礙ふるもの無し、何の道理ありてか心識顛倒せん。先師言へるあり、貧道昔この典を披閱し粗ぼ素意を識れり、立どころに餘行を捨て、こゝに念佛に歸す。それより已來今日に至るまで自行化他唯念佛を事とすと。遺書の意趣偏に稱名を勧め、存生の自行専ら念佛に在り。

於戲吾儕釋尊の在世に遇はざるは恨を二千餘年の霞に残すと雖、三部の妙典に値へるは是れ曠劫の大慶なり。導師の滅後に生れたるは憂を五百餘載の雲に致すと雖、九卷の章疏を披くは又悠世の多幸なり。抑先師上人は智天縱の秀才を懷き、學大藏を胸次に明らむ。而して末代行者の目足唯此の妙典に

在りと。此經これに因て光を増すこと千萬なるを知らず。世尊の應現か、又是れ導師の再誕か。

夫れ一明一暗は天の常なり。乍に現じ乍に没するは聖の權なり。哀なる哉、慧日影を隠して已に五五の星霜を送れり。愁雲卷き難く尊容眼に在り。微言止むと雖、筆蹟維れ芳し。教ゆる所は偏に本願に頼り、勸むる所は唯稱名に在り。此即ち經の肝心、釋の折中なり。此書（選擇集）を披く毎に面拜の昔を戀ひ、此行を修する毎に庭訓の古を思ふ。云云。

昭和十二年三月六日ヨリ同十二月マデ執行

淨土宗第二祖

鎮西國師七百年

淨土宗第三祖

記主禪師六百五十年

知恩院第二世

勢觀上人七百年

大遠忌法要

總本山 知恩院

昭和十一年八月十五日印刷
同年 八月廿五日發行

編輯人

柴田 玄鳳

發行人

中井 孝道

印刷人

松崎 辰三郎

京都東山知恩院

發行所 三上人遠忌事務局

終

